

2025年4月16日発行

事務所 武石地域総合センター内

TEL:0268-85-2511

<https://www.s-takeshi.jp>

印刷 中澤印刷株式会社



100年余前の 武石の熱気!!

藪合のKさんから、「生家の解体作業中にみつけた」と、古写真が寄せられました。

歌舞伎を演じた記念写真のようですが、「いつ」「どこで」撮られたのでしょうか？

台紙に「丸子町服部写真館」とあり、丸子が町になった大正元年以降のようです。同3年(1914)には大宮諏訪神社で初めて御柱が行われ、藪合では芝居を奉納しています(『武石村百年の歩み』)が、大宮には舞台があります。この年の子檀嶺神社の御柱は皇太后崩御のため余興は中止されたので、大正9年の子檀嶺神社下の河原での小屋掛け芝居と思われます。

引き締まった表情に、100年前の地域の気合と若者の熱気を感じます。ひいお爺さんの顔があったら、事務局にお知らせください。

松島の夕照案内板設置



つくる会自然生活環境部会は、3月10日(月)に、大字下武石字松島に在る依田窪南部中学校敷地内に、郡奉行相馬与衛門が和歌に詠んだ武石八景の、8番目の案内版「松島の夕照」を設置しました。

ここもまた松のうらしま入日さす
影さえ長き春の夕映え

ここは、あの有名な松島同じ名前の場所、沈んだ夕日は空を紅に染めて、木立や家は長い影を引いている。なんと美しい夕映えであることか。

子育てに関する懇談会

つくる会子育て教育文化部会は昨年9月、武石保育園保護者44名の皆さんに子育てに関するアンケートを実施し、31名の方から回答をいただきました。

武石地域は自然や子供同士や、おとな・地域とのかかわりなどの環境が良いとする回答が多くありました。反対に児童公園や保育時間外の遊び場がもっと欲しいこと、地域全体の子供の数や人口が減少していること、交通や医療などへの不便・不安などが寄せられ、部会では意見をまとめて市(自治センター)に提出しました。市はアンケート結果の検討結果を共有したいとして、2月25日(火)に懇談会がもたれました。

市では、遊び場や交通問題などの子育て環境や生活の不便な点等について8項目にまとめ、現状



の施策や改善の可能性などについて説明があり、部会員と意見の交換をしました。財政的な問題や、立地環境で実現が難しい問題もありますが、制度があっても必ずしも周知されておらず利用が少ないものなどもあり、よりよい子育て地域づくりへの意見交換会となりました。

武石っ子まんなか交流会

2月4日(火)、つくる会子育て教育文化部会は、「みんなで楽しもう世代を超えて」武石っ子まんなか交流会を開催しました。

武石地域総合センターコミュニティーホール



に、武石保育園の年中・年長園児22人を中心に、保護者、デイサービスやすらぎの利用者、部会員など約60人が参加してにぎやかに交流会が行われました。

御柱祭おねりの奴の先箱体験では、奴体験者の大沢拓真さんと内田淳也さんの指導のもと、子どもたちは自分の絵で飾り付けた先箱を担ぎ、奴のしぐさや声出しを一緒にやりました。大沢さんは、「先箱をお家に持ち帰って、お父さんお母さんに奴の動きを見せてあげてください。皆さんが将来の御柱祭で奴の役を引き継いでもらえたら嬉しい」と子どもたちにエールを送りました。

また、こま遊び、福笑い、輪投げ、羽根つきやつくる会から武石保育園へ寄贈したけん玉を使った冬の伝統遊びでは、子どもたちは指南役や参加の大人たちと一緒に伝統遊びを楽しみました。

武石の春一番 Smileマルシェ

3月8日(土)、JA武石店を会場にチャリティーイベント「Smileマルシェ」が開かれました。イベントは、地域と音楽をつなぎ隊(代表児玉篤人さん)が主催したもので、収益金の一部は昨年元日の地震で被災した石川県輪島市の子ども食堂に贈られました。

ピザ、おにぎりなどのフードや手作り小物・おもちゃなどなど30数店のブースが並び、寒い一日でしたが沢山の人が出ました。ステージも設けられ、東山道浦野宿勇太鼓やダンス、ものまねなど行われました。また古民家たまり家では看板のお披露目があり、飴ころ餅やお茶の提供があり

ました。JAの生活展、社協のフードライブも行われるなど多彩なイベントとなりました。つくる会では「JAひだまりたけし」でソバ活性化組合のご協力により10割蕎麦100食を提供しました。



70年余の上武石文庫図書館Ⅲ

郷土史家 児玉卓文

上武石文庫の蔵書は490冊も残存し、開館時の本も「倫理学講義」「普通学講義」「家庭教育園之咲分」「最暗黒之東京」「題名不明」の5冊あることが分かりました。

難しそうな本ですが、「普通学講義」は陸軍の訓練を解説したもの、「家庭教育園之咲分」は、18世紀のイギリスの詩人・小説家オリバー・ゴールドスミスの翻訳本で、当時大学や語学学校の教科書として広く使用されました。『最暗黒の東京』は、強引に近代化を進める明治20年代の東京の下層民の生活実態を克明に叙述した記録です。

宗教改革者ルターの伝記などは、明治20・30年代の登録とあり、「小山文庫」から移管されたものと考えられますが、当時の青年たちは、読書に娯楽より社会の探求や自己研鑽を求めているように思われます。

明治43年の出来事を『武石村百年の歩み』の文化の項で見ると、「この頃、農閑期を利用して、法学者や講談師を招いて講演会や教育講和会などが盛んに開催された」とあります。

この原資料が無いのが残念ですが、この年、武石村出身の柳沢雅休さんが東京帝国大学法学部を、高橋信美さんが同大学医学部を卒業し、柳沢さんは一時帰郷して、上武石青年会が歓迎会を開いています。こうしたことも読書の傾向を醸しているのかもしれない。

大正期になると、書籍発行後すぐ購入して配架したものが目立ちます。

信濃毎日新聞の主筆を務めたこともある(明治32～36年)山路愛山が、大正元年に発行した「乃木将軍」、大正10年11月、上田で開校した「信濃(上田)自由大学」の講師として招かれ、翌年から別所温泉の常楽寺に移住し同大学を主導した高倉輝の「寒山拾得」、島崎藤村の「ある女の生涯」、賀川豊彦の「苦難に対する態度」(大正13)などです。

また、この時期は個人からの寄贈も多く、上武石の皆さんが文庫図書館を盛り立てようとした様子も分かります。

発行年が明治～大正期の本が3割弱あり、大正3年の県への届けには、予算10円、購入費5円、蔵書965冊、大正2年度閲覧延べ416人、1日平均18.09人とあります。

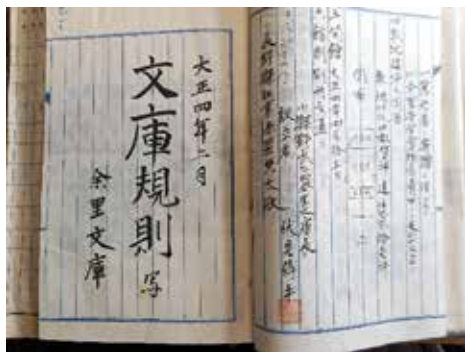
上武石文庫は小山真夫さんの力が大きいのです

が、大正3年1月開館した「小沢根青年団夜学校付属小沢根文庫」は、11月に「文庫規則」を添えて県に設立願い書を提出して受理されます。そして翌年には「余里文庫」が続きます。大正2年に「武石文庫」、同4年に「報徳文庫」(二宮尊徳の教えにより勤業などをする団体で、明治43年に13団体、社員361名)が設立された記録がありますが実態は不明です。

小沢根文庫は公会堂内に、余里文庫は余里分教場内に設置し(蔵書室と閲覧室の別あり)、ともに目的を「内外古今の図書・雑誌などを収集・保存して、広く公衆の閲覧に供し、一般社会の知徳啓発に裨補(たすけ、おぎなう)する」としています。維持費は有志の寄付金と小沢根は基本財産の預金と利子、余里は青年会経常費とし、運営には文庫長(小沢根は評議員互選、余里は青年会長)・理事・評議員を置くとしています。



文庫の蔵書を残すと思われる小沢根公民館の古図書類



図書は今日と同じように館内閲覧のみと貸出ができるものに分け、貸出は、「毎月1日と15日、午後七時係員出頭して開庫」し、「農蚕休業日・祝祭日等は午前9時より午後5時まで開庫」とし、いかにも労働する農民に向けた文庫という感じがします。

武石の人・団体

武石を盛り上げる
人やグループ紹介



“**和**とろん”は、はり・きゅう・マッサージの施術院です。院長の佐藤大輔さんは、柔道整復師・鍼灸あん摩マッサージ指圧師の国家資格を取得、千葉、埼玉、東京の施術院で21年間に渡り臨床の現場に立ってきました。“和とろん”では施術をすることを“お手当てをする”と言います。「実際に患者さんの体に手を当てて、患者さんと二人三脚で一歩懸命に症状と向き合うこと、これが回復を早める一番の要だと思えます」と“お手当て”の意味を話してくれました。

副院長で奥様の文さんは、仕事で行ったバンングラデシュで伝統医療と出会い、東洋医学の道を志して鍼灸あん摩マッサージ指圧師の国家資格を取得、介護施設で機能訓練のマッサージなどの仕事を行ってきました。また、日常の様々な体の不調や痛みから健康を取り戻す“呼吸法”の普及活動を行っています。「副作用のない万能薬であり、自分で自分をケアできる“呼吸法”をぜひ身に付けていただきたい」と話していました。



昨年4月に家族3人、秋田犬1匹で武石小沢根に移住、“和とろん”を創業しました。移住後は、施術院の仕事や敷地内の畑で自家用野菜の栽培の他に、イベントへの出展や健康

講座の講師、“はだしの歩道”の整備など、仕事と暮らしとともに地域の人たちや協力者との繋がりを大切にして様々な活動をしています。

移住のきっかけは、2021年から学び始めたパーマカルチャーとの出会いが大きな要因となったそうです。

“地球の環境を良くしながら生活をしていく”とするパーマカルチャーの学びの中で、“地球の健康と人の健康はつながっている”ことに気付き、“地球の環境を良くしながら私たちの体も良くしたい”との想いが強くなりました。そこで都市部から離れ、パーマカルチャーの生活スタイルを実



わ
和とろん

院長 佐藤 大輔さん

副院長 佐藤 文さん

践できる場所で農的な暮らしと仕事をしたいと、全国を探している中で上田市の紹介で武石地域を知り、やりたい事が実現できる場所として武石を選び、移住を決めたとのこと。

“はだしの歩道”は、足裏の感覚を鍛え直して歩行機能の向上や転倒防止を図り、足裏ツボの刺激で心身や内臓の健康を促進するために造られています。枯れ葉や丸太、小石の地面など、12種類の様々な感触を得られる地面が用意されています。



「子どもから大人まで、はだしで歩いて足裏の感覚を鍛え、元々あった足の機能を取り戻し、健康になって欲しいと思います。“はだしの歩道”がある広場は、子檀嶺神社の参道わきにあり、地域の人たちが集まって楽しく過ごせる場所にしたいと思っています。ぜひお越しください」とのことでした。

「すばらしい景色、美味しい空気と水、そして協力いただいた方々とのすばらしい出会いがありました。武石が後世まで安心して暮らし続けることができる場所となるように、“和とろん”で出来ることをやっていきたい」、また「地域の文化や風習を学び、後世に繋げていきたい」と武石への想いを話していました。

はりきゅう・マッサージ・呼吸法 **和とろん**

電話：(予約制) 0268-71-5486

住所：上田市武石小沢根209-3

ホームページ：<https://watoron.com>

